

「大学で学ぶ意味」を考える

— 名古屋経営短期大学と見晴台学園の学生から学んだこと —

山田 隆 幸

はじめに

本研究は、小・中学校で教員を務めて定年を迎えた筆者が、さらに17年間もいくつかの大学で教員を続けながら問い続けてきた「学ぶことの意味」の中間まとめである。ただし答えは出そうにない問いだが、かつて在職した名経短と現在、勤務している見晴台学園大学の障がいを抱えつつ困難な学びに挑戦している青年の学びを関わらせながら考察したい。

保育免許を取得するための必修講義担当であろうと思うが、乞われて子ども学科創設とともに本学で働くこととなった。それまでに他大学で同種の講義を2年間経験していた。学生たちは卒業後、学校や企業に就職していった。しかし非常勤講師ということで彼らの将来にまでは思いが行かなかった。しかし本学では専任教員として、講義だけでなく、ゼミ担当、学科会議・教授会の論議などで学生と大学教育の諸問題と真正面から向き合うこととなった。学生たちの現状、かかえる悩みの深さに応えきれぬ大学のあり方を模索、教員の生き方を問われたのである。どこの私学にも共通した問題であろうが、経営上の問題と教育理念を貫くことがしばしばぶつかる。「大学で学ぶ意味は何のか」が、その場合の私の思考の原点であった。

1. 「自分探し」のために入学した学生

(1) 受験制度に傷つき、自己否定感を抱えた学生たち

当時、名経短では、ゼミ学生のために自由に使える交流予算が組まれていた。「コンパ(ゼミ生の研究・親睦)」の費用である。学期はじめに開いたが、とにかく彼らは口の重い子たちであったが、皮切りに自己紹介を求めた。

「君たちは、どうして子ども学科を選んだんだい？」

当然、「保育士になりたい」という返答が多いと思っていたが、みんな、沈黙。やっと元気が良く、面白い子だと思っていた紗椰(仮名・以下同じ)が

「だって、高校出て就職しても、絶対にすぐ辞めることになることが見え見えだった、何も力が

無いんだもの。とりあえず大学にでも入ろうかなと……」

と口を開いた。けっこう欠席も多く、彼女は化粧に時間をかけ、オシャレで可愛いが心配な女学生であったが、自立するための時間稼ぎに大学に来たのだった。この答えには説得力があり、子ども学科はどうあるべきかを考えさせる重要な手がかりとなった。ちなみに卒業後の彼女を紹介すると、保育士の道でなく、父の仕事の後を継ぎ「経営者」として奮闘することになる。

いつも暗い顔をしていた正也がポツリと言った言葉は、

「通っていたのは不登校の居場所みたいな学校だったし、進路の相談をしたら、ここなら合格できると勧められた」

彼は学費を滞納しがちな苦学生でもあった。彼は、思い込みの激しいところがあった。最初の高校は受験・偏差値で生徒を見、また学則を厳格に守らせるという「管理的教師」とぶつかり合うことが多く、登校意欲を失っていった。不登校になった学生を受け入れる高校へ転校して学び直した。その後、彼だけでなく学科生の中に不登校体験者がかなり多いことが分かってきた。

この「コンパ」をきっかけに、「この学生は何でこの大学を選んだのだろう」ということを意識して見るようになった。一部には明確に「保育士になりたい」と考えて入学してきた学生もいたがあまり多くはなかった。親や教師に「安定した生活ができるためには資格を取っておくこと、それには大学を出なくては」と言われ、進路指導主任は「君の『偏差値』からみて合格できそうなところを選べ」ということで決めたという。

東京など大都市圏とくらべると愛知県の受験制度の特色は、「公立高校優位」にある。まず公立高校、ダメなら私立高校と親も教師も考えがちである。率直に言うと学生募集で苦勞するような私学は推薦制度で学生を確保するために内申書の点数で早くに合格させている。内申書の点数というのは、五段階相対評価の合計点が基本である。通知表の平均評価が「3」であれば 3×9 で 27 点となる。筆者も中学校で進路検討会議の経験があるが、大雑把に言うと当時はこの「27」が公立か私学かの見定め点であった。かなりの学生はこの「推薦制度」によって高校へ進学した。筆者は、この入試制度を肯定するものではないが、若いときに「合格か不合格か迫られるような厳しさ」の中で必死に勉強するという体験は大事であると思っている。しかし、高校も推薦入試、大学も推薦入試で厳しい受験勉強をすり抜けてきた彼らに、「学ぶ」ことの意味、面白さをどうつかませるかが大きな課題となった。

(2) 管理主義教育下で「自由」を渴望していた学生たち

子ども学科創設、最初の入学式を迎えたが、筆者は度肝をぬかれた。学生席は茶髪が多く、ライオン丸の勢揃いである。子ども学科もビジネス学科(当時)も同様である。保護者席も茶髪のママや、お兄いさんみたいなパパがちらほら、ピアスも目に付いた。(これはえらい大学に来たもんだ)と上から目線で見ってしまった。今はファッションに学生らの関心はあるようだが、当時は茶髪に関心が集まっていた。

あるときビジネス学科の学生と交流することがあり、彼らの心情が理解できた。子ども学科は

創設直後で少数定員ということもあり、多少なりとも遠慮があったのだろうか、それに対してビジネス学科の学生は自由奔放であった。

「高校の校則はメッチャ厳しくて、違反するとすぐ停学、ひどいセン公は体罰だ。大学は自由だから、入学したら茶髪とピアスをして、タバコを吸ってみたかった」

子ども学科も最初の新入生オリエンテーション合宿の時、数名が就寝時に屋外へ脱出、後から理由を聞いたら「実はタバコを吸っていた」と打ち明けてくれた。当時は学内に喫煙場所があり、講義中に教職員の吸うタバコの匂いが講義室に入るのには閉口するような状況であった。

「茶髪・ピアス・タバコの三点セットの魅力？を聞いたとき、想像もしていなかった言葉に絶句し、(それが大学に入っただけの夢かよ)とまたもや上から目線で学生を見てしまった。

この子たちの過ごした中学・高校は、当時、全国的に「東の千葉、西の愛知」と揶揄されるほど管理主義教育で名をなしていた。この三点セットは、彼らにとって自由の象徴であり、管理主義への抵抗であった。「自由を真の自由として使う人格発達」をどう保障するかが高等教育の大きな課題であることを教えられた。彼らは悩み戸惑いつつも卒業時には社会人として育っていった。

このエピソードはずいぶん前の話であり、今もときおり大学の研究会に顔を出したりするときに見る学生たちは、ずいぶん落ち着いてきた雰囲気である。

「愛情教育」というのは、こういう彼らの偏差値教育の後遺症である「自己否定感」と、管理主義教育が生んだ「間違っただけの自由」の理解で戸惑う彼らに寄り添い、厳しさとやさしさを交えながら、自己肯定感の獲得と自立した生活一生きる力の獲得を支援しない限り、美辞麗句、たんなる甘やかさに終わるのである。

2. 高等教育にふさわしい質を追求する大学を

(1) 大学は職業訓練所ではない

今は保育士資格、教員資格を得るための必修教科が膨張しすぎている。発達保障という専門職は単なるスキルの獲得では務まらない。卒業し、幼稚園や保育園に勤めたものの心を病んで退職するケースをしばしば見た。幸い復職したという(ただし別の園)ことも聞く。仕事がきついということもあるが、退職に追い込まれたきつさの中身が問題である。子どもを管理的に扱う、つまり行儀のいい子、決まりを守る子、大人が扱いやすい子にしつけることを看板にしている園に問題が多いようである。最近の大学はとにかくたくさん資格が取れるところがいいという風潮の中で、やたらと必修単位の取得に追われ過ぎているのではないかと不安に思う。資格を取ることとその仕事に就いてから力を発揮することとはイコールではない。多様な状況に対して柔軟に対応できる力が求められる。そのために学生には自由な、自立した学びが重要である。特定の技能の獲得だけを求めるのなら大学は不要となってしまう。

(2) 「学びを通して、ゆたかな人間・人格の形成をめざす」大学を

名経短を退職後、見晴台学園大学で引き続き学生と向き合うこととなった。さらに非常勤として愛知県大、ふたたび名経短でも教えることとなったが、相変わらず「大学で学ぶ」意味を考え続けることとなった。とりわけ見晴台学園大学は、全国で唯一の障がいを持つ青年専門の大学であり、新しい経験であった。

中学校で「特殊(当時はこう言われていた)」学級の社会科担当を7年、小学校での「特殊学級」の担任を3年経験し、教員生活のしめくりとして見晴台学園大学から声が掛かったのは、願ってもないことであった。

開校式で見晴台学園の田中学長から「最新の科学・技術、文化について、ゆっくり・じっくり・安心して学びあえる」、「学びを通して、ゆたかな人間・人格の形成をめざす」という開校の辞があった。納得できることであったが具体的にどのように講義を組み立てるか手探りであった。

義務教育段階では、障がい児・者教育を担当すると、「学年の基準レベルを下げ、量を減らし、理解しやすい授業」と考えがちである。原因は「通常学級の授業・講義にはついていけない」という、もっとも目につく現象に引きずられてしまい、「学習障害」を中心的問題と見てしまうからである。そのため実際の学年よりも下の学年の教科書を使い、量を減らし、時間をかけて授業をすればだいに理解力が高まる、いずれ追いついて「原学級」に戻れることもあるのではなどという願望のもとに「あと追い教育」に陥る。「促進学級」と言われることもあった。田中学長の提起は、障害児・者教育だけでなく、今の教育全体に関わる提起でもある。特に短期大学は、資格の取得、即戦力になるだろうという期待での技能訓練に傾斜していないだろうか。保護者にもその声は強い。

しかし大学は高等教育機関として位置づけられている。「最新の科学・技術、文化」について学び、「発達年令にふさわしい学び方を通して、ゆたかな人間・人格の形成をめざす」場所である。そうはいうものの今、多くの大学が学生の基礎学力の低下に頭を痛めている。「読めない、書けない、話せない」の三重苦である。目に付く学生の力不足を受けとめつつ、「最新の科学・技術、文化」について学び、「発達年令にふさわしい学び方を通して、ゆたかな人間・人格の発達をめざす」ための大学像と講義のあり方を考える。

3. 「読む・書く・発表する」は、自己表現のツール・学びの柱

何でもPC、スマホの時代であるが、否定的な側面だけでなく、情報獲得と自己表現のツールとして積極的に評価している。コロナ禍もあって急速にオンラインによる教育が進み、IT器機が教育改革の主役であるかのごとく、横文字・カタカナ、はたまた訳語ミスかと思われるような造語(例えば『アクティブ・ラーニングや個別的最適な学び』)を並べた本が氾濫する。筆者は今や死語となりつつある「生活綴り方的教育方法」と「生活教育」を教育理論と実践の柱にしている。とくに「調べ学習」が柱である。これは障害を持つ青年の学びでも変わらない。「読む、書く、話す」で講義を構成する。「聞く」が抜けているのは、意識的である。講義中の説明はとにかく短くする。教師が長々としゃべれば、それだけ学生たちの自主的学びの時間は減っていくからである。

日本の学校教育は、「先生が説明する一生徒が聞いて理解するーテストで理解度を確かめ、評価する」をパターンとし、入試制度がこのパターンを支えてきた。一方で、これでは今の社会に生きる子ども・青年たちに「生きる力」を育てることはできないことが言われてから久しい。

「読む」とは情報収集である。しかしオンライン授業・タブレットでは限界がある。手軽ではあるが、本の魅力つまり広がりや深まりにはかなわない。学習材を提示するのは教師であり、もっといえば教材屋の作ったものである。子ども・生徒が教えられる側、受け身であることには変わらない。「調べ学習」はテーマを選び、文献を探し、その入門期や発展期にはネットの利用が有効である。

「書く」とは「考える」ことである。筆者はPCの恩恵に大きくあずかっている。頭に浮かぶ文を手書きにするには筆者は手の動きが遅い、さらに悪筆なので他の人に読んでもらおうとすると仕上げに大変な時間がかかる。加筆補正や誤字脱字の訂正が大変である。学生に講義の途中、あるいはまとめとして「わかったこと・考えたこと」などを書かせるが、手書きになるので時間がかかりすぎ、発表の時間がなくなったりする。今は、タブレットの活用による時間確保を考えている。

「話す」とは自分を「表現」することであり、「他者とのつながりを作る」ことである。挙手して意見を述べるというのが理想であるが、日本人の最大の弱点がここにある。人前で自分の考えを言うことは、間違ったら恥をかく、不利益につながるなどの経験からか、きわめて後ろ向きである。そうではなく、「学び合い」の心地よさをつかんでほしいと願っているが道は遠い。教育の中心課題は、「自立した人間に育つ」、そのため「人とのつながりを作る力を育てることにある」ということを痛感している。自分の思いを表現することがとてもへたくそ、自分を表現し、伝える手立ての獲得が遅れている、この弱さの克服に中心課題がある。学校教育という集団の場で、「読む力・書く力・話す力」を育てたい。しかし、ことばと文字の獲得はスキル学習だけでは解決しない。人とつながる生活場面を増やすことで、生きたことばの獲得・文字の獲得が可能となる。

「質を落とさない講義」の準備は、生活年齢と生活経験にふさわしい発達課題を持った学習材の工夫で始まる。講義で学び、理解を深めることによって、今度は自分から表現する・発信する力が獲得でき、なかまとつながる力が豊かになる。こういう発達の連関を生み出す学習材の作成と講義の組み立てを考える。しかしコロナ禍で対面授業が困難、マスクは猿ぐつわであり、意見の表明をさらに困難にする。

まとめにかえて

おそろしいことに今年度で教員歴56年と半世紀を超えた。小学校、中学校、大学、分野は違うが障がい児・青年教育と、常に新しい場を与えてもらえた。公立学校と私立学校という違いも痛感させられた。しかし、3項でまとめたように私の教育の原点、教育方法は変わらない、変えられない。「学びの主人公、発達の主人公は子ども・学生」である。教員はそのパートナーであり、支援者であり、専門性を求められる。

山田 隆幸

注1 生活綴り方と生活教育論の参考文献として

「生活綴り方と教育」小川太郎 著 1966年明治図書

「生活教育の理論」川合 章 著 1981年 民衆社 「生活教育の探求」中野光 著 1984年 民衆社を
あげておく。

注2 文科省のHPで、関連資料が公開されている。

2. 新しい学習指導要領等を目指す姿：文部科学省 (mext.go.jp)

山田 隆幸 (元 名古屋経営短期大学子ども学科 准教授)